



JAPANESE A1 – STANDARD LEVEL – PAPER 1
JAPONAIS A1 – NIVEAU MOYEN – ÉPREUVE 1
JAPONÉS A1 – NIVEL MEDIO – PRUEBA 1

Wednesday 9 November 2011 (morning)

Mercredi 9 novembre 2011 (matin)

Miércoles de noviembre de 2011 (mañana)

1 hour 30 minutes / 1 heure 30 minutes / 1 hora 30 minutos

INSTRUCTIONS TO CANDIDATES

- Do not open this examination paper until instructed to do so.
- Write a commentary on one passage only. It is not compulsory for you to respond directly to the guiding questions provided. However, you may use them if you wish.

INSTRUCTIONS DESTINÉES AUX CANDIDATS

- N'ouvrez pas cette épreuve avant d'y être autorisé(e).
- Rédigez un commentaire sur un seul des passages. Le commentaire ne doit pas nécessairement répondre aux questions d'orientation fournies. Vous pouvez toutefois les utiliser si vous le désirez.

INSTRUCCIONES PARA LOS ALUMNOS

- No abra esta prueba hasta que se lo autoricen.
- Escriba un comentario sobre un solo fragmento. No es obligatorio responder directamente a las preguntas que se ofrecen a modo de guía. Sin embargo, puede usarlas si lo desea.

次の1の文章と2の詩のうち、どちらか一つを選んでコメントリー（解説文）を書きなさい。

1.

- 5 シルクロードを西に向かって歩いていてる時のことだった。中近東のどこかの町ですれちがった日本人に、一冊の文庫本を貰った。何百日も故国を離れ、異国をほつき歩いてる者にとつて、母国語の書物はひとつの宝石である。少なくとも私は、食物より日本の書物を恋しく思うようになっていた。話されるものであれ、書かれたものであれ、日本語への飢餓感^{きが}は常に満たされること^{つがや}がなかった。砂漠を走るバスの中で、風景に眼をやりながら、ひとりですつづつ日本語を呟いている自分に気がついて、ドキッとすることもあった。稀にシルクロードを東に下ってくる日本人に行き会うと、しばらくは日本語で言葉をかわし、別れ際に持ち合わせている日本語の本を交換するのが常だった。すでに読み終え、ただの石ころに化してしまった荷物としての書物を、相手の宝石のような書物と交換するわけだ。もちろん、事情は相手にとつても変わらない。私の石は相手の宝石になるはずだった。それから読み終わるまでの何日かは、心が弾むような刻^{とき}が持てることになる。事実、そのようにして松本清張や司馬遼太郎の一冊の本が、シルクロードを何十回となく往ったり来たりしているのだった。

- 10 その時、私が相手に何を渡したのかは記憶にないが、貰ったのは『さぶ』だった。文庫本用のカバーはすでになく、剥き出しにされた表紙にはくつきりと手垢がついていた。少なくとも三、四人の手は経てきているに違いないと思わせるような貫禄がついていた。相手と別れ、街道沿いのチャイハナで紅茶をすすりながら、私は山本周五郎をひろげた。ところが一行目の活字を眼で追っているうちに、なぜか急に胸が熱くなってしまったのだ。

- 15 たとえば『さぶ』の後半部で描かれる、無私の献身をつづけるさぶの、栄二へのたった一度の爆発といったシーンに心を揺さぶられたというなら、自分でも納得できる。照れ臭いかもしれないが狼狽^{もや}はしないだろう。ところが、私は一行目で駄目になってしまったのだ。

20 《小雨が霽^{もや}のようにけふる夕方、両国橋を西から東へ、さぶが泣きながら渡っていた》
駄目になった理由が分からなかった。さぶを追ってきた栄二が登場すると、さらに激しく感情を揺さぶられることになった。

25 《「帰るんだ」と栄二がいった、「聞こえねえのか」

「いやだ、おら葛西へ帰る」とさぶがいった、「おかみさんに出ていけつていわれたんだ、もう三度めなんだ」

「あるきな」といって栄二は左のほうへ顎^{あご}をしゃくった、「人が見るから」

しかし、ここに至っても、まだ一ページ目が終わるか終わらないかという部分でしかないのだ。私は訳がわからないままに、しばらく本をテーブルの上に伏せた。その先を読み進むことができなかつた。

(沢木耕太郎「書物の漂流 オンザロードI」
『地図を燃やす 路上の視野III』一九八二年)

(注)

松本清張 一九〇九〜一九九二年 小説家。特に推理小説が有名。

司馬遼太郎 一九二三〜一九九六年 歴史小説家。エッセイスト。

チャイハナ 中央アジア一帯にある茶店。

山本周五郎 一九〇三〜一九六七年 小説家。『さぶ』は一九六三年に書かれた時代小説。

- ― 「シルクロード」という場所は、文章にどのような効果を与えていますか。
- ― 『さぶ』が「私」に与えた影響を、作者はどのように表現していますか。
- ― この文章の構成の特色について解説しなさい。
- ― 作者はこの文章を通して、何を表現しようとしていますか。

2.

アゼリア

かつて
 こどもだったわたしは ブランコにのったまま
 杉の梢（しんすえ）のとがったさきから
 空に吸いこまれた

5 すべり台の傾斜におされては
 幼いともだちの歓声をくぐりぬけて
 母の腕（かひな）へ吸いこまれた

今日

10 石をしきつめた坂道にのぞんでひろがる庭園の
 漏斗状（ろうと）にひらいたアゼリアに
 わたしはもう吸いこまれない
 ブランコやすべり台はわたしの背中から遠く
 小さくなってしまうた

15 わたしはもう吸いこまれない
 けれど

わたしのなかの見えないものが
 見えない風に揺れ 見えない傾斜をすべって
 漏斗の芯へとおちてゆき

20 空の遠さでもない
 母の腕（かひな）の親しさでもない
 漏斗のむこうの見えない部屋の
 灰暗（ほのぐら）いあかるさがひろがった

(吉田加南子 「アゼリア」 『仕事』 一九八二年)

(注)

漏斗 形状が朝顔の花の形に似た器具。
 アゼリア ツツジ科の植物。漏斗状の大きな花が咲く。

- － アゼリアのイメージはどのような役割を果たしていますか。
 - － 「わたし」は過去をどのようなものとして捉えていますか。
 - － この詩における視覚的効果について解説しなさい。
 - － この詩の構成の特色について解説しなさい。
-